OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語における準体述語文と人魚構文の歴史 : 上代から中世末にかけて
Author(s)	坂井, 美日
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2013, 47, p. 75-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54403
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語における準体述語文と人魚構文の歴史

── 上代から中世末にかけて ──

坂井　美日

キーワード：準体述語文／人魚構文／名詞述語文

1. はじめに ── 日本語における準体述語文の衰退

かつて古典日本語には、用言の連体形で構成された節が、あたかも名詞述語のように、コピュラ（c.f.5.1）を伴って述語の位置に立つという構文が存在していた（以下、「準体述語文」と称す）。

（1）艶にもすごくも見ゆるなりけり。（源氏・帚木）

（2）爰で晩まで酒にするぢや（曽根崎心中）

（1）は、「見ゆる」という、動詞の連体形で構成された節が、「なり」というコピュラを伴って述語の位置に立ち、あたかも名詞述語のように振舞っている。また（2）も同様、「する」という、動詞の連体形で構成された節が、「ぢや」というコピュラを伴って名詞述語のように振舞っている。

このような構文は、現代標準日本語では文法的に許容されず、通時的変化の中で衰退したとされる。

2. 先行研究 ── 準体述語文から名詞述語文へ

日本語の準体述語文の衰退については、信太氏の一連の研究に言及がある。要約すると、以下のようである。

（3）信太（1970;1976;1987;2006）

a. かつて用言連体形は、体言相当句を構成する機能を持っていた。

b. aの機能は、中世末までに衰退し、準体は連体修飾構造に合流していった。

c. bにより、述語の位置においては、〈用言連体形＋コピュラ〉で構成されていた準体述語文〈用言連体形＋名詞＋コピュラ〉の形式へと交替していった。

3. 本論の目的

信太氏の調査により、準体述語文から名詞述語文へという通時的な大枠が把握された。しかし近年、〈用言連体形＋名詞＋コピュラ〉が述語の位置に立つ構文は、統語的に複雑であることが明らかになってきており（次節）、それを踏まえて、改めて検証が必要であると考えられる。

本論はその手始めとして、上代から中世末までのデータを分類・提示し、各時代の共時的記述及び、それに基づく通時的変遷の推定を行なう。

4. 〈連体形＋名詞＋コピュラ〉が述の位置に立つ構文

4. 1. 正規の名詞述語文と擬似的な名詞述語文

日本語の述語位置に〈連体形＋名詞＋コピュラ〉が立つ構文の中には、正規の名詞述語文と、統語的にはそう分析できない擬似的なものとがある。

（4）a. 花子は大阪大学に通う学生だ。（名詞述語文）

b. 花子は大阪大学に通う予定だ。（擬似的な名詞述語文（人魚構文））

（4）aは、連体修飾節を受けた名詞句が述語に立っていると分析され、主語名詞句と述語名詞句を等位・包摂関係で結ぶ（花子＝[[大阪大学に通う]学生]）典型的な名詞述語文である。一方（4）bは、一見（4）aと同じ形に見えるが、述語と思われる名詞句と主語名詞句が等位・包摂関係ではない

（花子≠（［大阪大学に通う］）予定）。

4. 2. 人魚構文 ――擬似的な名詞述語文

（4）bのような構文は、前半が動詞述語文、後半は名詞述語文という形になっており、そのねじれた様相が「まるで人魚のような文である」ことから「人魚構文(Mermaid construction)」（角田2011）と称される。これは、日本を含む「アジアの七つの言語とアフリカの一つの言語にしか確認されない」（角田2011）として、近年注目を集めている構文である。

この構文は、未だ通時的研究がなされておらず、日本語においてどのように成立・発達してきたのか明らかではない。しかし、先に問題とした準体述語文の歴史と、名詞述語文の歴史に、深く関与することが予想される。

よって本論では、上記3者、すなわちa.用言連体形節のみが述語に立つ準体述語文、b.用言連体形節＋名詞が述語に立つ名詞述語文、そしてc.用言連体形節＋名詞が述語に立っていると見える人魚構文の、3タイプの構文の歴史を扱い、以下の点を検証する。

［1］各期共時態における3つの構文の様相

［2］3つの構文それぞれの通時的変遷

［3］3つの構文の通時的関係の考察

なお本論は、上代から中世末を対象とする。

5. 本論の枠組み・定義

本論では上記の目的から、以下の外形のものを研究対象とする。

①用言連体形節＋コピュラ（準体述語文）

②用言連体形節＋名詞句＋コピュラ（名詞述語文／人魚構文）

用例を採集、検討するにあたり、本論の枠組み・定義を記す。

5. 1. コピュラ

コピュラの定義としては、本論では意味の面から、〈二つの名詞句が等価・包摂関係にあることを示す形式〉と規定し、コピュラの統語的特徴には、名詞に後接するという性質があると捉える。

各時代語のコピュラは次とおりである。

（5）各時代語のコピュラ

上代：ϕ、[1] ぞ、にあり、なり[2]

中古：ϕ、にあり、なり、にてあり

中世：ϕ、なり、にてあり、であ、ぢや

5. 2. 準体述語文

用言連体形節が、名詞述語のように、直後にコピュラを伴ってそのまま述語位置に立つ構文を、準体述語文と称す。

5. 3. 人魚構文

人魚構文の基本的な定義と典型的構造は、次のように規定されている。

（6）人魚構文の定義（Tsunoda (2013), p.16、訳は坂井[3]）

a）(7) の構造である。

b）節の主語名詞と述語名詞が等位・包摂関係にない。

c）節は単独で文となりうる。

（7）人魚構文の構造（同上）

［節］名詞句―コピュラ

先の（4）bは、節（「花子は大阪大学に通う」）＋名詞（「予定」）＋コピュラ（「だ」）となっており、主語名詞句と述語名詞句は一致せず（花子≠予定）、節は単独でも文となりうると分析でき、人魚構文と認定される。

また、（7）の名詞句のスロットには、典型的には狭義の名詞が入るとされるが[4]、いわゆる形式名詞も立ちうるとされ、次の（8）b、c、dのようなモ

ダリティーをあらわす構文も、(6) を満たす、人魚構文の一種とされる。
(以下、名詞句スロットは □ で囲んで表示する。)

(8) a. 花子は大学に行く[はず]だ。
b. 昔は海に行った[もん]だ。
c. 病人はおとなしく寝ておく[こと]だ。
d. 花はいつか枯れる[ん]だ。

5. 4. 節＋名詞の関係の分類 ——内の関係／外の関係

また、被修飾名詞述語文と人魚構文は、節と名詞の関係から、内の関係タイプと外の関係タイプに分類される。この分類を採用するのは、各共時態おける節と名詞の繋がりを見る目的からである。

(9) 内の関係：節と名詞句の結びつきが強い。
・節と名詞句が項関係にある。
・節は名詞の外延を限定する機能を担う。
例)［焼いた］魚
(目的語と述語の関係に還元が可能で (魚を焼いた)、その外延は、「焼いた」という事態で特徴付けられた事物に限定される)

(10) 外の関係：節と名詞句の結びつきが弱い。
・節と名詞句に項関係は見出せない。項は節内で充足している。
・節に後続する名詞は、節と関わりを持たず、外に付加されるかたち。
・名詞の意味は抽象的で内容の補充を必要とし、その内容は節が担う。
例)［焼いた］臭い (項関係に還元できない (×臭いを焼いた))

6. データと記述

以下、データの提示と記述を行う。本節のデータは以下の凡例による。

6. 1. 凡例

・本論では、上代（7~8C頃）、中古中期（11C頃）、院政期（13C頃）、中世末期（16C頃）に時代を区切り、各期口語資料（上方）の一部をサンプルとし、用例を採集した。用いた資料と範囲は以下の通り。

上代：万葉集（音仮名表記中心の巻（5,15,17,18,19,20）の確例のみ。ただし、東歌、防人歌を除く。）

中古中期：宇津保物語（俊蔭）、源氏物語（桐壺～花宴）、更級日記

院政期：宇治拾遺物語（巻1～巻4）、十六夜日記

中世末：エソポのハブラス

なお調査には、【資料一覧】の翻刻、CD-ROM、電子テキスト等も用いた。

・今回は典型を見る目的から、採集対象は主節・コピュラ肯定に限定する。また、疑問文は問題が複雑であるため（係り結び、係助詞との承接、疑問詞と連体形の呼応等）、今回は対象としない。

6. 2. 概観

各期のデータを計量的に概観すると、次のようである。

表1　概観

	名詞述語文		人魚構文		準体述語文	保留	計
	［clause］N（COP）		［clause］N（COP）		［clause］（COP）	名述 or 人魚	
	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係	—		
上代	56 (77.78%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	16 (22.22%)	72
中古中期	148 (51.39%)	17 (5.90%)	0 (0.00%)	11 (3.82%)	98 (34.03%)	14 (4.86%)	288
院政期	52 (36.62%)	4 (2.82%)	0 (0.00%)	2 (1.41%)	79 (55.63%)	5 (3.52%)	142
中世末	51 (48.57%)	3 (2.86%)	0 (0%)	24 (22.86%)	1 (0.95%)	26 (24.76%)	105

上表のような結果により、本節では、主に次の3点を指摘していく。

・上代には準体述語文と人魚構文と外の関係の名詞述語文の確例が

無い。

・中古以降の資料に、準体述語文と人魚構文と外の関係の名詞述語文の確例がみられはじめる。

・準体述語文の急減と、人魚構文の急増が、時期を同じくする。

以下、各期共時態の詳細を記述する。

6. 3. 上代

6. 3. 1. データ

上代のデータは次の通りである。

表2

上代（7～8C）	名詞述語文		人魚構文		準体述語文	保留	計
	[clause] N (COP)		[clause] N (COP)		[clause] (COP)		
節と名詞の関係	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係	—	名述 or 人魚	
万葉集	56	0	0	0	0	16	72
%	77.78	0.00	0.00	0.00	0.00	22.22	—

今回の上代データには、準体述語文の例がなく、人魚構文の確例もみられない（ただし人魚構文は保留あり cf.6.3.2.）。また、名詞述語文でも、外の関係の例はみられず、内の関係の名詞述語文の例ばかりである。具体例は、以下のようなものである。

名詞述語文・内の関係

（11）空蝉は数なき身なり（宇都世美波 加受奈吉身奈利）（20・4468）

（12）この照らす日月の下は天雲の向伏す極みたにぐくのさ渡る極み聞こし食す国のまほらぞ（企許斯遠周 久尓能麻保良叙）（5・800）

6. 3. 2. 保留：人魚構文の可能性がある例 ——ものなり文

本論では、上代に人魚構文の確例を指摘することは難しいと考えているが、人魚構文の可能性がある構文が存在するため、ここに補足する。

次に挙げる（14）（15）のような、名詞句スロットを「もの」とする例が16例存在するのであるが（上表の「保留」16例）、これらは解釈によって人魚構文とも見られるかもしれない。

（14）くれなゐは移ろふものそ（久礼奈為波 宇都呂布母能曽）（18・4109）

（15）梅の花いつは折らじと厭はねど咲きの盛りは惜しきものなり

（佐吉乃盛波 乎思吉物奈利）（万葉17.3904）

このような例は、主語名詞句と述語名詞句が等位包摂関係であるという解釈（「くれなゐ」＝「もの」）も、そうでないという解釈（モダリティー文）も、両方の可能性があり、古典文献上では断定しがたい。(14) の例は、主語名詞が「咲きの盛り」という時間的概念で、物体を指し示す自立名詞「もの」と等位包摂関係にあるという解釈の方が難しいのかもしれない。この場合、名詞句スロットを埋める「もの」は、自立名詞ではなく、一般的事実を述べるモダリティー要素である可能性があり、文法化による人魚構文の例として分析できる可能性もある。

しかしこの16例の中に、中世末の例(cf.6.6.)ような、人魚構文の確例と言えそうな例は存在しない。よって本論では保留とし今後の課題としたい。[5)]

6. 4. 中古中期

中古中期のデータは次の通りである。

表3

中古中期（11C頃）	名詞述語文		人魚構文		準体述語文	保留	計
	[clause] N (COP)		[clause] N (COP)		[clause] (COP)	名述 or 人魚	
節と名詞の関係	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係	—		
宇津保	35	4	0	0	23	7	69
源氏	90	12	0	7	66	6	181
更級	23	1	0	4	9	1	38
中古中期合計	148	17	0	11	98	14	288
%	51.39	5.90	0.00	3.82	34.03	4.86	—

この中古中期のデータから準体述語文の例が見られ、少数ながら人魚構文

の例も存在している。またこの期のデータには、外の関係の名詞述語文も、増加していることが指摘できる。それぞれの具体例は、次の通り。

名詞述語文・内の関係

（16）その人は極楽浄土の楽に琴を弾きあはせて遊ぶ人なり（うつほ）

（17）これも、いみじげなる小いゑ也。（更級）

名詞述語文・外の関係

（18）（人の身を得た故について、）
尊勝陀羅尼を念じたてまつる人を供養したる故なり。（うつほ）

人魚構文

（19）山の端、錦をひろげたるやう也。（更級）

（20）舟のかぢ取りたる男ども、（中略）とみに舟も寄せず、うそぶいて見まわし、いといみじうすみたるさま也（更級）

（21）女は、ましてさまざまに思ひ乱れたるけしきなり。（源氏・花宴）

準体述語文

（22）（猫に変化した大納言の娘が夢枕に立ち、事情を説明する場面）
をのれは、大納言殿の御女むすめのかくなりたるなり。（更級）

（23）なに心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすごくも見ゆるなりけり。（源氏・帚木）

準体述語文は約34%あり、発達していることが窺える。

人魚構文は5例と少数であり、発達しているとは言えないが、（19）～(21)のように明らかな確例が存在し、当構文の構造自体は既に存在していることが窺える。名詞句スロットには、(19)「やう」(20)「さま」(21)「けしき」など、様態をあらわす名詞句が入り、人や物をさす主語名詞とねじれをおこしている。

また上代と同様、次の(24)(25)のように、名詞述語文とも人魚構文とも捉えうる「ものなり」文の例もある（9例）。

（24）保留
この木は阿修羅の万劫の罪なかば過ぎむ世に山より西にさしたる

枝枯れむものぞ（うつほ）

（25）保留

あやまちして見む人のかたくななる名をも立てつべきものなりと戒む（源氏・帚木）

これらはモダリティー解釈をすれば、人魚構文の候補である。

6. 5. 院政期

院政期のデータは次の通りである。

表4

院政期（13C頃）	名詞述語文		人魚構文		準体述語文	保留名述 or 人魚	計
	[clause] N (COP)		[clause] N (COP)		[clause] (COP)		
節と名詞の関係	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係	—		
宇治	45	4	0	2	76	5	132
十六夜	7	0	0	0	3	0	10
院政期合計	52	4	0	2	79	5	142
%	36.62	2.82	0.00	1.41	55.63	3.52	—

やはり人魚構文は少なく、まだ発達しているとは言えなさそうである。一方、準体述語文は、約56%と飛躍的に発達していることが窺える。

それぞれの例を挙げると、次のようである。

名詞述語文・内の関係

（26）その坊は薬師寺の大門の北のわきにある坊なり。（宇治）

名詞述語文・外の関係

（27）（疫病神が家に印を付けて回るが、ある家にだけ印を付けない。）

（この家は、）永超僧都に魚を奉る所なり。（宇治）

準体述語文

（28）しかるべくておのれには見えさせ給へるなり。（宇治）

（29）佐渡の國にはまことに金の侍なり。（宇治）

（30）山陰にて嵐も及ばぬなめり（十六夜）

人魚構文

（31）この女時々は見返りなどすれども<u>わがともに蛇のあるとも知らぬ</u>げなり。（宇治・巻四・57）

6. 6. 中世末

中世末のデータは次の通りである。

表5

中世末（16C頃）	名詞述語文		人魚構文		準体述語文	保留名述 or 人魚	計
	［clause］N（COP）		［clause］N（COP）		［clause］（COP）		
節と名詞の関係	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係	—		
エソボ	51	3	0	24	1	26	105
%	48.57	2.86	0.00	22.86	0.95	24.76	—

この中世末資料において、人魚構文の確例が増加している。そして、その人魚構文の増加と表裏に、準体述語文の例が著しく減少している。各具体例を示すと、次の通り。

名詞述語文・内の関係

（32）それは<u>すぐれてよい証</u>ぢや（Soreua Sugurete yoi xiruxi gia）

名詞述語文・外の関係

（33）（言いたいことは）<u>わが手に持った物を取りはずすなといふこと</u>ぢや

（vaga teni motta monouo torifazzuṛunatoyu coto gia.）

準体述語文

（34）いろいろの穿鑿の後、<u>板に開かるる</u>なり。

（fanni firacaruru nari.）

人魚構文

（35）私は惣じて人に仇を仕らず、<u>ただ道理の推すところを人に教ゆるばかり</u>でござる。

（tada dŏrino voſu tocorouo fitoni voxiyuru bacaride gozaru）

（36）各々このことを僉義するのみであった。

（vonovono cono cotouo xenguiſuru nomide atta）

（37）人はただ、我に等しい人を伴はうことぢや。

（Fitoua tada vareni fitoxij fitouo tomonauo coto gia）

（38）a. 中から出て取ることは、多いものぢや

（nacacara dete torucoto ua vouoi mono gia）

b. 言葉の行跡に違う時は、人がこれを信ぜぬものぢや。

（cotoba no yukuato ni tagau toki ua fito ga kore uo sinzenu mono gia）

c. 賢い人の俗にはまづ事を始めぬ前にその終りを見るものぢや。

（Caxicoi fitono narainiua、mazzu cotouo fajimenu mayeni ſono vouariuo miru mono gia.）

人魚構文と判断した例の名詞句スロットは、以下の内訳である。

表6

原因・理由・事情			情況	時間	量・程度		モダリティー		計
故	為	次第	ところ	ほど	ばかり	のみ	こと（確例）	もの（確例）	
2	1	1	1	1	3	1	6	8	24

文献上の頻度だけではなく、名詞句スロットに立つ要素のバリエーションも増えている。よってこの中世末にはある程度人魚構文の発達が窺える。また、この中世末には、（37）（38）のように、「こと」「もの」を名詞句スロットにとり、モダリティー文を構成していると判断できる確例がある。（37）は、主語名詞句が「人」、述語の名詞句スロットが「こと」でねじれをおこしている。教え諭す場面の発話で、一般的な教訓を述べるモダリティー文脈である。（38）aは、主語名詞が「こと」で述語の名詞句スロットが「もの」でねじれをおこしており、一般的な事態を述べるモダリティー文脈である。さらに「もの」「こと」が名詞句スロットにくる例は、文献から人魚構文と判断できない保留が24例あり、これらを合わせるとかなりの量になりうる。

7. まとめ

7. 1. 各構文の歴史

以上のデータをまとめると、各構文の歴史は次のようである。

7. 1. 1. 名詞述語文の歴史

内の関係の例は上代から存在し、大きな増減はない。

外の関係の例は上代にはなく、中古以降にみられはじめるが、その後の割合はのびないまま変動はない。

7. 1. 2. 準体述語文の歴史

準体述語文は、上代にはなく、中古以降に見られはじめる。院政期まで多数みられるが、中世において激減する。

7. 1. 3. 人魚構文の歴史

人魚構文は、上代に確例はなく、中古以降に見られはじめるが、院政期までは非常に少ない。しかし、中世においてバリエーション・例数ともに増加する。

7. 2. 構文の通時的関連

上記のような観察から、3者の関係は以下のようであると考えられる。

7. 2. 1. 内の関係の名詞述語文と他の構文との相関性

内の関係の名詞述語文は全期に渡って特に変動しておらず、他の構文の変動と相関している可能性は低い。

7. 2. 2. 外の関係の名詞述語文と人魚構文

a. 成立について

人魚構文の成立については、節と名詞句の関係が類似している外の関係の名詞述語文の成立と連動している可能性が指摘できる。

現代語の共時的記述からも、2者の存在には強い相関性があることが指摘されている。現代伊良部方言の人魚構文を記述したShimoji（2013）には、以下のように見解が述べられている。

（39）Shimoji (2013)

The existence of the main-clause-like (i.e. external) AC is definitely a relevant factor for an AC to develop into the MMC in Irabu

b. 発達について

成立に関しては上記のように相関性が指摘できるが、中世以降の人魚構文の急激な発達に関しては、外の関係の名詞述語文との連動はみられず、ここに相関性は指摘できない。

7. 2. 3. 準体述語文と人魚構文

a. 成立について

準体述語文の成立と人魚構文の成立については、2者の確例がほぼ同時期に見られはじめるということから、連動して成立した可能性は考えられるが、一方から一方が生まれたという派生関係は想定しにくい。

b. 衰退と発達について

準体述語文の衰退と人魚構文の発達については、前者の減少と後者の増加が時を同じくしていることから、相関している可能性は非常に高いと考えられる。

上記a.b.から、準体述語文と人魚構文は、当初は別個に成立し併存していたが、前者が衰退したことで後者に合流していったということが想定される。

ここから本稿では、「準体述語文から人魚構文への合流」という通時的変

化の仮説を提案する。

準体述語文から人魚構文への合流に関する詳細な検討については、後稿に譲りたい。

［注］

1) φ：各時代語もコピュラの省略が可能である。（これは魚だ。／これは魚。）各時代、コピュラと認められる形態素があるため、構造的にはコピュラのスロットがあると考え、そのスロットに有形の要素が必須というわけではないと捉える。

2) コピュラ「なり」の判断について
「なり」には、コピュラのものと、〈音あり〉を起源とするいわゆる伝聞推定をあらわすとされるものの二種類がある。「なり」の前接が用言（準体）の場合は、次の基準を複合して判断した。
〈形態的判断〉
・動詞の屈折接辞が明らかに終止形であれば伝聞推定として除く。
・動詞がいわゆるラ変の場合、撥音便化が起こっていれば伝聞推定として除く。
〈意味的判断〉
・主語が一人称であれば、コピュラとする。
・話し手側の事情を説明しているものであれば、コピュラとする。

3) Tsunoda(2013), p.16
The prototype of the mermaid construction (hereafter, MMC) has the following three properties.
(a) It has the structure shown in (1).
(b) The subject of the 'Clause' and the 'Noun' are not coreferential.
(c) The 'Clause' can be used as a sentence by itself.
(1) Prototype of the mermaid construction ('MMC'):
［Clause］ Noun Copula

4) Tsunoda(2013),p.25
In the prototype of the MMC,（中略）, the 'Noun' slot is occupied by an independent word

5) ただ注目される点として、後世との比較においてではあるが、このように自立名詞とも、モダリティー要素とも分析可能な構文が存在するという事実は、一方では名詞をモダリティー要素／接語へと再解釈（文法化）していくきっかけがあったとも捉えられる。文法化した要素がNスロットを埋める類の人魚構文の基盤として、この保留例は看過できないと考える。

6) 現代伊良部方言の人魚構文を記述したShimoji(2013)にも、その言語体系に外の関係

の名詞述語文が存在するということと、人魚構文が存在・発達することは、強く関連するという見解が述べられている。

Shimoji (2013)

The existence of the main-clause-like (i.e. external) AC is definitely a relevant factor for an AC to develop into the MMC in Irabu

［資料一覧］

万葉集：佐竹昭宏・木下正俊・小島憲之（2001）『補訂版万葉集本文篇』塙書房

うつほ物語：中野幸一校注（1999）『新編日本古典文学全集14うつほ物語』小学館（底本：尊経閣文庫蔵前田家各筆本二十冊）

源氏物語：伊井春樹編『CD-ROM角川古典大観 源氏物語』角川書店（底本：大島本）阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集20源氏物語①』小学館

更級日記：鈴木知太郎・川口久雄・遠藤嘉基・西下經一校注『日本古典文学体系20土佐日記 かげろふ日記 和泉日記 更級日記』岩波書店（更級日記は西下經一校注、底本：定家実筆本）

宇治拾遺物語：小林保治・増古和子校注（1996）『新編日本古典文学全集50宇治拾遺物語』（底本：宮内庁書陵部蔵無刊記古活字本）

十六夜日記：岩佐美代子校注（1994）「十六夜日記」『新編日本古典文学全集48中世日記紀行集』所収（底本：九条家本）

（丸岡桂・松下大三郎編（1909）『国文大觀 第七編 日記草子部』明文社の岡島昭浩氏入力電子テキストも適宜使用 http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bungaku.htm）

エソポのハブラス：大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハブラス本文と総索引』清文堂

［参考文献］

信太知子（1970）「断定の助動詞の活用語承接について―連体形準体法の消滅を背景として―」『国語学』82

――――（1976）「準体助詞「の」の活用語承接について―連体形準体法の消滅との関連―」『立正女子大国文』5

――――（1987）「『天草版平家物語』における連体形準体法について―『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など―」『近代語研究第七集』、武蔵野書院

――――（2006）「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」―句構造の観点から―」『神

女大国文』17
角田太作（2012）「人魚構文と名詞の文法化」国語研プロジェクトレビューNo.7

Tasaku Tunoda (2013) 'Mermaid construction: an introduction and summary. *Adnominal clauses and the "Mermaid" construction: Grammaticalization of nouns*,15-66. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistic

Asako Miyachi (2013) Mermaid construction in Old and Early Middle Japanese, *Adnominal clauses and the "Mermaid" construction: Grammaticalization of nouns*,179-220. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistic

Michinori Shimoji (2013) Mermaid construction in Irabu, *Adnominal clauses and the "Mermaid" construction: Grammaticalization of nouns*,179-220. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistic

坂井美日（大学院博士後期課程学生・日本学術振興会特別研究員（DC））

SUMMARY

The History of Clausal Nominalization and Mermaid Construction: With a Special Focus on Old to Middle Japanese

Mika Sakai

Classical Japanese had a construction in which a clause headed by an adnominal predicate functioned like a predicate nominal, carrying a copula verb. There is the agreement among Japanese linguists that this 'clausal nominalization construction' (CNC) came to be replaced by a modification construction in which an adnominal clause was followed by a head noun to modify. However, a detailed examination of this syntactic reanalysis has been left untouched in the literature.

In this study I aim to examine the two diachronically related constructions in detail, with a special attention to their syntactic characteristics. In particular, I will divide the newly developed construction into two broad types: 'Ordinary Predicate Nominal Construction' (OPNC) on the one hand, and on the other, 'Mermaid Construction' (MMC), a construction that looks like a OPNC but are distinct (Tsunoda 2011). By examining the data from Old to Middle Japanese, I will point out the following facts:

a. Old Japanese did not have clear examples of the CNC or MMC.
b. Clear examples of the two constructions are attested in the data from Early Middle Japanese onward.
c. At the end of Middle Japanese, the number of examples of the CNC dramatically increased while that of the MMC dramatically decreased. That is, the development of the former and the decline of the latter coincide.

Based on the above facts, I argue that even though there seems to be no correlation between the origin of the CNC and the MMC, there must be a strong correlation between the historical decline of the former and the development of the latter. This further leads to the conclusion that the CNC developed into the MMC via the predicate nominal construction with the noun after the adnominal predicate.